

山岳部の思い出

昭和44年応化

日比谷 孟 俊

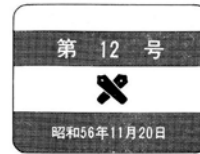
● 春

小金井の生協食堂脇の売店は、薄汚れた白衣やツナギの上級生に混って計算尺、原書の厚い教科書それに「懇念」と小さな文字が四角く印刷された黄色い表紙の工学部レポート用紙を買い求める新2年生で賑わっていた。その生協の売店の向いの陽だまりに僕等のルームがあった。食堂で昼飯を受け取り、ルームでだべりつつ食う。これが僕等の決まりだった。2週間前迄は御厄介になっていた冬用テントが、ルームに返されて机の上に置かれている。煙草をふかしている4年生や春山で真黒に雪焼けした3年生の隣に、日吉で勧誘された1年部員達が所在無さげに座っている。親切な2年生が、山岳部伝来の期末試験の問題集を見せながら「山岳部に入ればこれをやるよ」などと言っている。運動着に着がえ、ルームの鍵を床屋の原さんに預けて、桜の美しい多摩霊園を走る。春の小金井の風景であった。

● 夏

ポコ、ポコ、ポコ……、前を歩く仲間の鈍重で黒い山靴の厚いゴブラム底が、北アルプス横尾谷右俣の合宿予定地を目指して、岩を踏んで響く。目に入るものと言えは仲間の山靴と毛むくじゃらの脚。額から流れ落ちた汗の滴が、乾き切った山道に吸い込まれる。キラキラと塩の結晶が光る腕に時間を見る。「未だ15分しか歩いていない。あと3倍は頑張れ」自分に言い聞かせる。「頑張れ!!」、リーダーのかけ声が、黙々と進む40kgのザックの隊列の頭上を走る。

カラッと乾いた岩稜に囲まれた眩しい雪渓での雪上訓練。ピッケルが3,000mの陽光をカラッと一瞬反射し、固い雪に打ち込まれて滑落を止める、若い情熱が山にぶつかった日々の思い出である。



● 秋

錦繡の甲斐駒ヶ岳尾白川に友は逝った。友の行方を求めて、皆血走った眼をしていた。友の亡骸を滝壺から引きあげ、ツェルトにくるみ、友の兄上、山岳部のOB、そして土地の人達に助けて貰って2日ばかりで麓に下ろした。友の様に大柄で、髪に白いものの混る父君は紺の上衣を着て、到着を一人佇んで待っておられた。夕闇迫る川原に安置された時、父君は跪いて友の登山靴に手を置かれ、そして友の手を暫く握っておられた。友は中等部出身の秀才であり、管理工学科の1年であった。その父君も一昨年他界された。

● 冬

急変した天候に行く手を阻まれて白魔の稜線上にテントを設営する。オーバー手袋のままの捗々しくない作業に上級生の罵声が飛ぶ、やっと張り上がったテントにアイゼンを脱いで潜り込む、ラジウスが手早く用意され、火がつけられる。“ゴーッ”と言う燃焼音に緊張感もほぐれ、凍りついた帽子からは水滴が垂れる。やがてミルクが温められ、皆で分かちあう。身にも心にも生気が蘇える一瞬である。

● 山、都会、OB

山岳部での生活は山の中のみではなかった。山行の前には、OB宅にOBと現役とが集まり、山行計画を揉んだ。侃侃諤諤と議論が続く、終電車が無くなりOB宅に泊まり込んだこともあった。

今年は、山岳部の機関紙である嘯雲第4号が18年ぶりにOBと現役との協力で出版された。山岳部OBにして部長であられた機械工学科小茂鳥先生に、刷り上りを見て頂くことが出来なくなってしまったのは至って残念である。小茂鳥先生初め亡き岳兄等の御冥福を祈りつつ筆を擱く。